

Ça va changer

－ 2006年大統領選挙からみたベナンの民主化 －

岩田 拓夫

はじめに

アフリカ諸国における民主化開始から10～15年を経た。アフリカ全般の民主化状況は楽観的でなく懐疑論も多い。一方、少数ではあるが民主化の定着に向かおうとしているアフリカの国々がある。その代表例とされるのがベナンである。

小稿では、現地調査を踏まえて、民主化開始後4度目となった大統領選挙をとおしてみたベナンの民主化の現在について報告したい。

1. ベナンの政治的歩み

ベナンは近年こそアフリカの「民主主義モデル」との評価が定着しているが、1960年の独立後5度の軍事クーデタによる政権転覆を経験し、ケレク政権下(Mathieu KEREKOU, 在任期間1972 - 91年)ではマルクス・レーニン主義を掲げ、国有化された企業の杜撰な経営と汚職、公共部門の肥大化の末に国家経済の破綻を経験してきた。80年代後



大統領就任を控えたヤイ・ボニ氏(左)とケレク大統領
(Le Matinal Web版より)

半に教員、学生、組合を中心にして始まった民主化を求める社会運動の末に、ケレク大統領はマルクス・レーニン主義、一党制を廃止し(1989年12月)、アフリカ初となる国家主権の暫定的移譲を伴う、国民各層の代表によって構成された国民会議の開催(1990年2月19日～28日)を受け入れた。ベナンの民主化は国民会議によって幕が開かれ

た。国民投票を経て第七共和国憲法が採択され(1990年12月)、翌年の議会、大統領選挙を経て誕生したN.ソグロ(Nicéphore SOGLO、在任期間1991 - 96年)政権に引き継がれた。96年の大統領選挙ではケレクが振り返り、2001年には再選された。

ベナン政治の特質は根強い地域対立にある。独立後も北部、南西部、南東部の3大地域間の主導権争いによる政治的対立に悩まされてきた。内戦を回避するための妥協の産物として、1970年には2年ごとに三つの地域から交替で大統領を選出する大統領輪番制が導入された(1972年のクーデタによるケレク政権発足後廃止)。民主化開始後も、ベナンの地域対立は政治的影響を及ぼし続けてきた。しかし、ベナンでは地域対立を抱えながらも、単独で過半数を占める地域・民族集団が存在せず、軍や議会が特定の民族によって独占されなかったことにより権力の流動性が確保され、民主化後は交渉と妥協をとおした政治運営を維持してきた。

2. 2006年大統領選挙の注目点

立候補受付は2006年1月15日に締め切れ、公式に26名の候補者の間で新大統領の座が争われた。3月5日の投票日に向けて、2月17日から3月3日まで選挙運動が繰り広げられた。

今回の選挙には、民主化後の3度の大統領選挙では見られなかった三つの新しい注目点があった。一つめは、民主化後のベナンを牽引してきたケレク大統領とN.ソグロ前大統領が、憲法規定に従い立候補しないなかで迎えた選挙だった、という点である。ベナン第七共和国憲法(1990年)では、大統領の任期は1期5年で通算2期までに制限された(第42条)。1996年に大統領に振り返

投票用紙(2006年3月5日投票用)



(独立国家選挙管理委員会より)

いたケレクは、2006年3月に退任が予定されていた。また、憲法では70歳以上の大統領候補者も認められない(第44条)ため、N.ソグロ前大統領の出馬もかなわない。憲法修正問題はメディアを通じて盛んに議論が行われ、国民の高い関心事となった。2005年7月、ケレク大統領は世論を尊重し、三選出馬を否定する記者会見を行った。近年、政権維持のために憲法を修正し、大統領任期制限を撤廃する国(ブルキナファソ、ギニア、トーゴ、チュニジア、チャド、ウガンダ)が目につくなかで、ベナンはアフリカにおける法の支配の防波堤となった。ここに、事実上の選挙運動が始まった。

二つめは、地方分権化の大統領選挙に与えたイ



ヤイ・ボニ候補のポスター（ヤイ・ボニ候補ウェブサイトより）



ヤイ・ボニ候補の選挙集会（筆者撮影）

ンパクトであった。分権化に伴う制度改革によって任命制から住民による選挙で選ばれるようになったコミュン代表者（市長^{†1}・評議員）の発言や働きかけが、大統領選挙における有権者の投票行動に大きな影響を与えると認識されるようになった。

三つめは、選挙戦での本格的なインターネットとマニフェストの導入であった。有力候補者はホームページ、ブログを開設し^{†2}、支援者を介して収集した有権者のメールアドレスに一斉にメールマガジンを送り続けた。なかでもヤイ・ボニ（公式標記は、Boni YAYI）候補の戦略は効果的であった。ヤイ・ボニは、CFA フラン圏西アフリカ諸国の開発を担う「西アフリカ開発銀行」(BOAD) 総裁を務め、クリーンな経済政策の専門家というイメージとともに急速に支持を拡大した。ヤイ・ボニ陣営では、2002年頃から出馬のための周到な

準備が始められたと言われる^{†3}。ベテラン政治家に失望し、変革を望む人々の間に急速にヤイ・ボニ待望論が高まった。インターネットサイト、マニフェストの製作、なかでも簡潔で明快なスローガン“Ça va changer”(変わろうとしている)^{†4}は、大衆の心をつかんだ。

3. 大統領選挙を迎えて

(1) 投票日までの選挙運動

選挙運動期間中には大きな暴力的衝突も起こらず、メディアの報道も自由に行われた。テレビ、ラジオからは、投票方法、民主主義の重要性、暴力の否定を呼びかける番組や楽曲が繰り返し流れた。ベナンにとって幸運なことは、国民会議が民主主義の「フェティッシュ」(お守り)として人々の間で共有されていることである。筆者が選挙運動期間中に訪問したアムス候補(Bruno AMOUSSOU)の

†1 選挙で選ばれた評議員の間の互選で市長が選出される。

†2 代表的な候補者のサイトは以下のとおりである。YAYI Boni(<http://www.yayiboni.com> <http://www.yayi-boni.com>)Adrien HOUGBEDJI(<http://www.houngbedji2006.com> <http://www.houngbedji2006.com>)Bruno AMOUSSOU(<http://www.brunoamoussou.com> 閉鎖)

†3 Mathias Hounkpé氏とのインタビュー、国会政策研究所(CAPAN)、ポルトノボ、2006年3月3日。

†4 正式なスローガンは、「Ça peut changer(変わることができる)」、「Ça doit changer(変わらなければならない)」、「Ça va changer(変わろうとしている)」であった。



選挙運動期間中の風景(筆者撮影) 左: ウンベジ候補の政治集会 右上: アムス候補の選挙本部 右下: L.ソグロ候補の支持者の行進

選挙事務所から去ろうとした時に、支持者が別候補の選挙事務所への道案内を申し出てくれたことに驚かされた。その時の「たとえばアムス氏でなくても、選挙で選ばれた人がわれわれの大統領である」という言葉は印象的であった。また、決戦投票直前に敗色濃厚となった元首相のウンベジ(Adrien HOUNGBEDJI)支持者からは「残念であるが、民主主義を守ることで海外からの投資も入り、国が発展するのであれば、悪くない。」と聞いた。ヤイ・ボニに投票した人からは「彼がダメだったら、5年後に交代させればいい。」と語るのを聞いて、ベナンの民主主義的な政治文化の定着の一端に触れることができた。

とはいえ、ベナンの大統領選挙にまったく問題がなかったわけではなかった。大統領選挙の運営にあたった独立国家選挙管理委員会(CENA)の準備不足が投票日の混乱を引き起こした。中立性に問題があるとしてCENA委員の選出がやり直された。さらに、選挙実施予算に100億CFAフランと見積もったCENAと65億CFAフランしか支出

できない政府の間に対立が生じ、活動開始が今年1月中旬にまでずれ込んだ(財政上の問題は国際社会からの支援により解決し、選挙人登録が実施された)。CENAの準備不足は3月5日の投票日の混乱に直結した。投票作業に必要な物品(投票箱、投票用紙記入ボックス、ハンコ、インク)の配布の遅れが投票開始を大幅に遅らせた。

ただし、選挙全般の透明性と公正さは疑問視されず、投票率は74.86%と高かった。翌日、アメリカ政府は選挙の公正さ、透明さとベナン人の政治的成熟をたたえ、ベナンをアフリカの民主主義の「灯台」(Phare)と持ち上げた。

(2) もうひとつの選挙戦

開票の結果、決戦投票^{†5}に進んだのはヤイ・ボニ候補(得票率35.64%)とウンベジ候補(24.12%)

†5 現憲法(第45条)では単独過半数を獲得する候補がない場合、上位2候補によって投票日から2週間後に第二次投票が実施される。

であった。過半数獲得、もしくは2位以下に圧倒的な差をつけて決戦投票へ進むことを見込んでいたウンベジ陣営、ウンベジ支持のフランスの思惑は完全に外れ、失意の沈黙を続けた。

開票速報とともに決戦投票に向けた選挙協力協議が開始された。3位のアムス候補(16.22%)、4位のL.ソグロ候補(Léhad SOGLO, 8.40%)、5位のイジ候補(Antoine Kolawolé IDJI, 3.23%)は協働連合(Coalition Wologuèdè)を結成し、決戦投票のキャスティングボードを握った。アムスは、ウンベジと政治的ライバルとして勢力の削ぎ会いを続けてきた。イジは、ウンベジ候補の地盤であったプラトー県の票を一次選挙で半分近く奪った。ウンベジとL.ソグロ候補の父のN.ソグロ元大統領(現コトヌ市長)との軋轢は根深かった。1996年の選挙で再選を狙ったN.ソグロ大統領(当時)には、一次選挙で首位に立ちながら、二次選挙直前にウンベジが当初の約束を覆してケレクへの支持表明を行ったため再選を阻まれた怨念がある。ウンベジはソグロ邸を訪れ、涙ながらに謝罪し、自身への支持を訴えたといわれる^{†6}。しかし、協働連合は国民の意見を尊重するとして、決戦投票2日前の17日夜にヤイ・ボニ支持を表明し、選挙は投票日前に事実上決した。二次選挙は手続きと化し、ヤイ・ボニが74.51%を得票してウンベジ(25.49%)を大差で破った。

むすび

Ça va changer(変わろうとしている)

民主化後4度目となった大統領選挙は大きな暴力的衝突もなく平和裏に終わり、通算30年間ベナンを率いたケレク大統領は静かに政治の表舞台

から退場した。クーデタなどによって2度政権の座に就いたアフリカの指導者は珍しくないが、法を遵守して任期を全うし、国民から敬意を払われながら2度大統領を退任したアフリカの指導者は稀有であり、その意味ではケレクは経済政策、汚職対策などに無策でありながらも、時代の流れを読み民主化を妨害しなかった点では確かに「賢人」であった。

今回の大統領選挙では、ヤイ・ボニ旋風にみられたようにベナンの政治風土であった地域主義の変容が明確になった。民主化後3度の大統領選挙でみられた北部はケレク支持、南部はN.ソグロ支持という明確な地域間の対立軸は崩れた。

アフリカにおける選挙の繰り返しを通じた民主主義の定着に関する評価は一樣ではない。しかし、少なくとも言論・政治活動の自由の保障が続く状況においては、選挙の度ごとに政治的議論が高まることは民主主義のルール定着に貢献すると考えられる。ベナンでは、政治的な立場、主張の違いはあっても、国民会議に立ち返り、暴力を否定し、民主主義の価値を再確認してきた。

“Ça va changer”(変わろうとしている)を選挙スローガンに掲げて当選したヤイ・ボニ新大統領は、大統領就任式(4月6日)から2日後には政界を刷新する閣僚人事を発表した。ベナンが民主主義を発展させながら改革を実行し、民主主義の灯台としてアフリカを照らし続けることができるのかが注目される。

小稿は、筑波大学比較市民社会・国家・文化特別プロジェクトならびに龍谷大学アフラシア平和開発研究センターからの支援による現地調査によってまとめることができました。記して感謝申し上げます。

^{†6} Le Matinal, 2006年3月20日付。

(いわた・たくお/筑波大学)